

第3回 新潟睡眠障害研究会

医療法人水明会佐潟荘 医局

平成29年4月18日、第3回 新潟睡眠障害研究会（場所：新潟グランドホテル、共催：MSD 株式会社）に、院長の北村と副院長の上村が参加しました。特別公演は、筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構（WPI-IIIS）教授の櫻井 武先生による「睡眠・覚醒の制御メカニズムとオレキシンの役割」でした。神経ペプチドであるオレキシンには、共通の前駆体からプロセッシングにより切り出されるAとBの2つのアイソフォームがあり、受容体もOX1RとOX2Rの2つあり、オレキシンAはOX1RとOX2Rの両方に、オレキシンBはOX2Rに結合親和性が高いとのことでした。ちなみに、情動脱力発作を伴うナルコレプシーの患者さんの髄液中において極端な濃度低下を示すのは、前者のオレキシンAの方です。

視床下部外側野に散在するオレキシン産生ニューロンは、青斑核、結節乳頭体核、縫線核など脳幹のモノアミンニューロンへ密に投射していて、食欲、睡眠と覚醒、自律神経系の制御のほか、内分泌系を調節し、報酬系にも関わるなど、非常に多彩な生理作用を有していることも説明されました。当然、その生理作用は2つの受容体を介して発現されます。睡眠と覚醒に関して、レム睡眠の制御に対してはOX1RとOX2Rの両方が、覚醒の維持に対してはOX2Rがより深く関係しているとのことでした。一方、情動とはOX1Rがより深く関係しているとのこと。睡眠障害のみならず、悪夢や不眠が頻発する心的外傷後ストレス障害を含む情動障害に対する創薬への展開が、大いに期待されます。多数の自験データを含めた最先端の講演内容は高度なものでしたが、臨床家にも非常に興味を引く内容でした。